

運営部会（3/5）で出された主な意見及びその対応

1. UNDB-J からポスト 2020 年目標への提案について 議事 3

【運営部会での意見】

- UNDB-J の 10 年間の活動を踏まえた意見を提出すべきではないか。
- SDGs と生物多様性の関係を整理した上で UNDB-J から意見を提出すべきではないか。

【対応案】

○UNDB-J の活動を踏まえた意見としては、行政、経済界、NPO・NGO、ユース、学識者など多様なセクターが連携するための枠組が愛知目標の実施において有益であり、ポスト 2020 年目標においてもこうした枠組の設立が有効であること。

○SDGs との関係整理については幹事長にご相談の上 UNDB-J 内の有識者と検討を進める。

参考○ポスト 2020 目標への幅広い意見出し期限は 8/15（CBD 事務局）。

○何れの主体も <https://www.cbd.int/post2020/> から意見を提出可能。

2. UNDB-J の成果のまとめとその発信 議事 2

【運営部会での意見】

- できたこと、できなかったこと、次世代につなげていくべきことを取りまとめ、発信。そして後継者に伝えていくべきではないか。

【対応案】

○ 地域フォーラムを始めとする UNDB-J の活動の中で、幹事長にご相談の上、運営部会で整理の上、幹事会、委員会において議論を進める。

○ 結果については国内外に積極的に発信するとともに、3での議論に繋げる。

3. 2. を受けたポスト UNDB-J 検討の進め方

【運営部会での意見】

- UNDB-J の次の活動についても議論を進めるべきではないか。

【対応案】

○ 2のとりまとめ作業と並行して UNDB-J の活動の中で、幹事長にご相談の上、運営部会で整理の上、幹事会、委員会において議論を進める。

○ 次の活動につなげていくべきことを H31 年度重点事業として議論を進める。

4. せいかりレーのインセンティブ

【運営部会での意見】

- 多くの人に参加してもらうためにはリレーに参加することへのインセンティブを明確にする必要。

【対応案】

○ せいかりレーについて HP 等を通じて国内外に発信。

UNDB-J の成果のまとめ方

■これまでの委員会等における主な意見

- ・ 取組だけをまとめても次に繋がらない。何が学べたか、知識や知恵が重要。
- ・ UNDB-J だけでなく、その他の団体との関わりの可視化が重要。
- ・ 進捗の様子が動的にわかるようにまとめることが重要。
- ・ できたこと、できなかったこと、次世代へ繋げていくことをとりまとめる。
- ・ 目標を立てたものについては、どれくらいまで進んでいるのか明示する。

■整理の考え方

- ・ 取組、成果、課題を分けて整理し、それらを次世代へ繋げる。
- ・ 目標を設定している事業等については、目標に対する実績がわかるように整理する。
- ・ これまでの具体の取組については、取り組んだ結果だけでなく、改善するための行動についても明記する。
- ・ 成果については、単なる結果だけでなく、大きく進捗した要因等を可能な限り整理する。
- ・ 課題については、短期的に対応できるもの、長期的に対応していくもの両方の視点で整理する。

■本日の議論

- ・ 本日の「資料 2-3」をベースとして、今後運営部会や幹事会で検討を進めていきたい。
- ・ 資料 2-3 について、分類等の考え方等に関して意見交換。

UNDB-Jの成果及び課題(案)

資料2-3

	取組	目標値 (2020年末)	現在の状況 (2019年3月末)	これまでの具体的取組	成果	課題
情報交換						
1	委員会等の運営			①委員会(年1回)、幹事会(概ね年2回)、運営部会(概ね年3回)を開催。 ②活動に寄付してくれた企業に感謝状を贈呈	①多様なセクター間の情報共有。 ②連携により、新たな事業(事業計画における重点事業等)が創出。 ③連携に伴う波及効果確認。 ④各セクターのネットワークを活用した広範囲への情報発信。 ⑤委員会2011年から継続	①議論が生物多様性に取り組んでいる団体の中で閉じている。 ②より幅広い主体に参画していただくことが必要
2	国内向け情報交換			・自治体ネットワークと連携して全国ミーティングを開催 ・地域フォーラムを開催	①UNDB-Jの活動内容等を各地方で発信。 ②連携事業の認定団体を公の場で授与することで、活動の意欲が高まる。	①来場者は生物多様性に取り組んでいる方が主。(出席者はほぼ同じ仕事をしている人)
3	海外への情報交換			・COPの本会議でUNDB-Jの取組を発信。 ・COP12以降はサイドイベントとして、CBD事務局と共催で「UNDB-DAY」を開催。 ・ブース展示としてUNDB-Jの活動をまとめたパネルを展示	①UNDB-Jの取組、成果等を海外に発信。	①UNDB-Jでは、海外の登壇者が少ない(日本の登壇者が多い)と来場者が少なくなる(日本だけになる)。
連携						
4	ロードマップ			中間評価を踏まえてロードマップ作成	①目指すべき社会像、取組の方向性等を共有 ②毎年フォローアップし、新たな取組が報告。	①毎年同じ活動のみ実施。
5	MY行動宣言	100万宣言	22万宣言	・MY行動宣言の作成 ・生物多様性アクション大賞開始 ・各主体がオリジナルのMY行動宣言を作成 「教育施設展示版」、「農林水産版」、 「mother earth版」、「女子高生版」、「ダイバー版」 ・スマホ対応ページの作成 ・「所属」を設けたサイト作成。	①UNDB-J組織内での連携したMY行動宣言を作成 教育施設展示版、農林水産版 ②UNDB-J組織外の団体への波及効果も確認 女子高生版、ダイバー版 ③企業のCSR担当者や大学の先生が高評価。 ④構成団体の広報誌を見てMY行動宣言を知った企業が全職員宣言。 ⑤個別に企業や団体等においてほしいことにより宣言数が大幅に増加。	①目標が高すぎたため数集めに行きがち ②MY行動宣言自体の知名度が低い。
6	生物多様性アクション大賞			・大賞として環境大臣賞・農林水産大臣賞を創設 ・受賞団体に対してアンケートを実施	①毎年100件以上の応募。その内8割以上が新しい取組。 ②アンケートの結果約8割が「認知度・信頼度が向上し活動がし易くなった」と回答。 ③表彰式を踏まえて受賞者間で新たな連携した取組が創出	
7	生物多様性の本箱	300館・施設	193館・施設	・環境教育活動、読み聞かせ活動等が活発な、教育施設、小学校、団体に寄贈 ・生物多様性の日+環境月間や夏休みなど図書館の自主期間展示活動で「生物多様性の本箱」特集の働きかけ	・2018年3月末現在33都道府県に寄贈、自主展示あわせ、51施設で常設。 ・県単位で自治体図書館が連携し、自主展示企画を実施(岐阜県) ・環境イベント等での出前展示企画も展開(熊本、鳥取、東京、北海道ほか)	
8	にじゅうまるプロジェクト	2020宣言	902宣言	・愛知目標のアイコン化やガイドなどの普及ツールの開発、エコプロ等での宣言団体との協働展示などの普及を実施。 ・国際会議等の参加・情報収集を通じて、生物多様性の世界動向を、国内に発信。COP11からサイドイベント(COP12よりUNDB-DAY)での事例発表も実施 ・2年に1度、宣言団体が集まる会合を開催し、民間レベルでの愛知ターゲットの取組み拡大と、ネットワーク化、評価を行ってきた。	①愛知目標の普及啓発。 ②田んぼ10年プロジェクトや、電機電子4団体生物多様性データベースとの連携など、愛知ターゲットの取組み可視化につながる活動に発展。 ③UNDB-J認定連携事業の構築や、UNDB-Jのロードマップの目標値や民間参画の主流化事業の指標となるなど、優良事例発掘や進捗把握のツールとなる。 ④ポスト2020枠組みで着目される生物多様性コミットメントへの、事例・ノウハウの提供	①効果的な運営のための資金確保 ②ネットワーク拡大と、宣言事業の質向上機会の提供のバランス ③愛知目標毎に実施を高めるためのサブネットワークの構築が不十分
9	認定連携事業					
10	グリーンウェイブ	(参考)2018年までの累計参加者団体数:2891 参加者数:約24万人 植樹本数:約31万本		・「ミス日本みどりの女神」を「地球いきもの応援団・グリーンウェイブ大使」に任命 ・オフィシャルパートナー制度を創設	①オフィシャルパートナーに任命された団体が積極的に活動。	①グリーンウェイブには登録していない団体が多い。

UNDB-J からポスト 2020 目標への提案意見（案）

1. マルチステークホルダーによるプラットフォームの有効性

- ① 日本では、愛知目標の達成に向けて各セクターの参加と連携による具体的な行動を推進することを目的として、行政・企業・NGO・アカデミアなど多様なセクターの代表からなるプラットフォーム（UNDB-J）を 2011 年に設立した。
- ② この UNDB-J では、生物多様性に関する国際的な動向や各セクターの取組、課題等の情報共有を通じて、UNDB-J 構成団体が主体的な取組を推進したことはもちろんのこと、各セクターのネットワークを活用した広範囲の情報発信や表彰制度等を通じて、日本国内の幅広い多くの主体に対して、生物多様性に関する取組の呼びかけ等を行ってきた。
- ③ その結果、多様な主体間の連携を通じ、従来にない新たな取組が生まれ、更にそこから派生的な活動が多く主体によって展開されてきた。
具体例として、一人ひとりが生物多様性との関わりを身近な生活の中で実感し行動するための「5つのアクション（たべよう、ふれよう、つたえよう、まもろう、えらぼう）」を作成するとともに、それらに関する優良な取組を表彰する制度を設け、全国で生物多様性に取組む人々のモチベーションを高めるとともに、国内のベストプラクティスの掘り起こしに努めた。その結果、毎年多くのセクターから活動事例の応募がなされるようになった。加えて、この 5つのアクションについて、UNDB-J の構成団体である自然保護団体と動物園が連携して教育施設用の 5つのアクションを作成し普及啓発を行った。さらに、UNDB-J 以外の組織（高校生やダイバーなど）も自らの活動に即した 5つのアクションを作成するなど、取組の波及効果が確認された。
- ④ 生物多様性はあらゆる人間活動と関係しており、より多くの主体が多様なセクターと連携しながら、生物多様性を意識した活動を自主的に取組んでいくことが重要である。
- ⑤ そうした観点から、「ポスト 2020 目標」の検討にあたって、「生物多様性の主流化」を中核に掲げるべきであり、「生物多様性の主流化」に向けて、各国において、UNDB-J のようなマルチステークホルダーで構成されるプラットフォームを立ち上げていくことが有効である。日本としては、これまでの様々な自主的・主体的な取組を通じて得られた知見やノウハウを国内外に発信することを通じ、地球規模での生物多様性の主流化のさらなる推進に貢献していきたい。

2. 生物多様性を通じたSDGsへの貢献を目指す視点の重要性

- ① 2030年を目標年としたSDGsは経済社会の幅広い課題を包含しており、SDGs14、15を中心に多くのターゲットに、愛知目標の内容が組み込まれている。
- ② そもそも生物多様性はあらゆる人間活動と関係しており、生物多様性への取組を通じて、様々な社会課題の解決に貢献することが見込まれる。国連が採択した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の前文にある「環境・社会・経済の三側面の調和」は、生物多様性における2050年ビジョンである「自然との共生」の考え方とも合致している。
- ③ ポスト2020目標の策定にあたっては、SDGsと生物多様性との具体的な関係性について事例を含めて明確にしたうえで、SDGsの様々なゴールへの貢献を旗印に、これまで生物多様性に取り組んできていない多様なセクター、主体とも連携しながら、生物多様性へ取組を一層推進していく視点が重要である。

以上